

# 自己肯定感と特別支援教育を意識した学級経営に関する研究

河本勝一郎（高知県公立小学校）<sup>1</sup>

是永かな子（高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門  
高知ギルバーク発達神経精神医学センター）<sup>2</sup>

## A Research on Classroom Management that Focusing on Self-esteem and Special Needs Education

Katsuichiro Kawamoto<sup>1</sup>, Kanako Korenaga<sup>2</sup>

1: A Elementally School in Kochi Prefecture, 2: Kochi University Research and Education Faculty Humanities and Social Science Cluster Education Unit, Kochi Gillberg Neuropsychiatry Centre

### 抄 録

本研究では、自己肯定感と特別支援教育を意識した学級経営を行った。具体的には、自己肯定感を高めるための取り組みについて菊池省三氏の実践である「価値語」・「成長ノート」・「ほめ言葉のシャワー」に取り組むことで、特別支援を必要とする児童がどのように他の児童とつながっていくのかという特別支援教育の視点も含めて、児童の成長と学級の成長をQ-Uの結果や児童の変容から分析することを目的とした。結果としてQ-Uでは、95.0%が安定群に属し、昨年度よりも安定的な集団になったと考察した。また特別支援の必要な子どもには教員は意図的な配慮を行ったり、特別支援教育の観点でそれぞれの実践や個別の成長を評価したりするように努めた。特別支援の必要な子どものQ-Uの改善も見られ、児童同士が学び合うなどのつながりの強化や児童同士のかかわりの改善が具体的な姿として増えた。以上から、自己肯定感を高める実践としての価値語・成長ノート・ほめ言葉のシャワーが自己肯定感を高め、特別支援教育を意識した学級経営に至る結果を導いたと考察した。

キーワード：特別支援教育、自己肯定感、学級経営、価値語、成長ノート、ほめ言葉のシャワー

### 1. 問題の所在と目的

全国学力・学習状況調査も10年目を迎えた。この間、数字が独り歩きを始め、各県は順位を上げることに必死になっている。しかし教育現場では、いじめや不登校等、複合的な様々な問題が起きている。学力状況調査という一つの基準が学校現場に入ってきたために、一人ひとりの児童に対応する時間が削られているのである。そのような中全国の学校現場では、児童同士の関係づくりを目指した学級経営に視点を当てた研修も多くなってきている。これまでは、授業改善や学習指導方法に関する研究が多くみられたが、学級経営についての研究は多くはない<sup>1</sup>。ゆえに今後は、学習指導と同時に学級経営の研究として、学級全体をとらえた様々な検証が必要であろう。

さて菊池省三氏は、小学校教師時代に「学級崩壊請負人」と言われた。学級経営と同時にコミュニケーション力を育成するために、児童をつなぐ実践を多く試みている。退職後は、全国の小中学校で模範授業や講演会を開いている。全国に、「菊池道場」と呼ばれる教師塾も多数開き、実践を積み上げている。これは、学校は学力だけではなく、人間を育てる場であるということを改めて感じている教師が増えている証でもある<sup>2</sup>。

本研究では、菊池省三氏の実践である「価値語」・「成長ノート」・「ほめ言葉のシャワー」に取り組むことで、特別支援を必要とする児童がどのように他の児童とつながっていくのかという特別支援教育の視点も含めて、児童の成長と学級の成長をQ-Uや児童の変容から分析することを目的とする。

## 2. 研究の方法

本研究では、20XX年度のA小学校における特別支援を必要とする児童が複数名在籍する5学年1学級40人に対して意図的な介入を行った。具体的には、特別支援を必要とする児童を含めた学級経営として、菊池省三氏の実践である「価値語」・「成長ノート」・「ほめ言葉のシャワー」を児童の実態に合わせ、教員がアレンジを加えた意図的な介入を行い、その実践の分析及び考察を行うこととする。

## 3. 実践

### 3.1 価値語による特別支援教育を意識した学級経営

#### 3.1.1 価値語

毎朝、菊池省三氏の価値語が書いてある日めくり「価値語カレンダー」<sup>3</sup>を利用し、カレンダーに書かれている価値語について説明を行った。そして児童に何が価値あることなのかを様々な場面で伝えた。児童の中に価値ある行動が見られた時や価値ある行動について伝えたい時には、児童の目につくように黒板の1/5を利用して、価値語を書いていった。「行事で育てる」ことも意識して、行事に向けての目標設定や行事に向けての取り組みを行う中での意識改革を行うために「成長ノート」を活用した。その中で、意図的にその時期に必要な価値あることを伝えたり、児童の成長ノートの中に価値ある言葉が出てきたときには、通信にのせたりすることで学級全体に価値語を広げた。規範意識だけではなく、これから生きていくうえで大切な価値とは何かを伝えた。成長ノートの中に、自分で新しい価値語を作り出す児童も現れた。帰りの会に行った後述する「ほめ言葉のシャワー」の中にも、友達の実動に対して価値語を加えてほめる児童も多数みられるようになった。菊池省三氏の実践のベースには、価値語がある。価値語によって、学級全体がどのような学級に育っていくべきなのか、個人はどのような行動をとるべきなのかを日々積み重ねていった。

#### 3.1.2 日めくり価値語カレンダー（写真1）

菊池省三氏が作成した日めくり「価値語カレンダー」を児童がいつでも見えるように黒板横に掲示した。日めくりカレンダーになっている。「1 リセット」「2 一人が美しい」など価値語を毎日一つずつ児童は目にする。価値ある言葉を毎日目にする児童は、価値語の語彙が増えていった。



写真1 価値語カレンダー

### 3.1.3 1/5黒板(写真2)

黒板の左1/5は、価値語を書くスペースに利用した。その日に教師が見つけた児童の価値ある行動を価値語として黒板に記していった。価値ある行動をした児童は、ほめられることで自己肯定感を高めることができた。その価値ある行動を価値語として学級全体に意識させていった。例えば、友達の発表に対して、発表する児童へ体を向けて姿勢よく聞いている姿を見つけると、「正対」と書く。これにより、どのような態度で友達の発表を聞くことが価値ある行動なのかを意識させた。

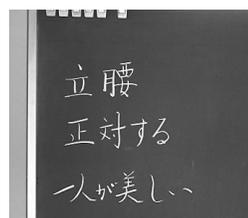


写真2 1/5黒板

## 3.2 成長ノートによる特別支援教育を意識した学級経営

成長ノートとは、B5版ノートに自分を振り返って記録していくノートである。菊池省三氏は、年間百数十回テーマを与えて児童に書かせている。これを、A4版の200字詰めノートに日記を書かせる中で活用した。4月から毎日宿題として日記を書かせた。毎日2ページ400字詰め原稿用紙1枚分を目標として書かせた。1日の自分を振り返る習慣をつけさせることも目的の一つであった。また、菊池省三氏の実践のようにテーマを与えることも増やした。例えば、4月の始業式から1週間が経つと、「この1週間で成長したこと」をテーマとして書かせた。自分の成長ぶりを機会あるごとにテーマを与えることで振り返らせた。修学旅行や運動会などの行事がある時には、準備の段階から「運動会の係会で学んだこと」「運動会を通して学んだこと」など、自分が成長していることを意識させるために、行事という非日常体験においては多くのテーマを与えた。

4月当初は、何を日記に書いたら良いのか困っている児童も多数いた。しかし、テーマを与えたり、帰りの会で友達の日記を紹介したり、日記を学級通信にのせたりすることで、友達からどのように日記を書けばよいのかを少しずつ学んでいった。特に学級通信には、行事を通して学ばせたい視点が書かれている日記や価値ある行動が書かれた日記を意図的にのせるようにした。そのことで、児童は自分の知らない場所で友達が価値ある行動をとっていることやどのような行動をとることが価値ある行動なのかを学んでいった。

また、宿題として毎日書かせていく中で、少しずつではあるが書くことに対する抵抗感が減っていった。毎日様々な場面で価値語を伝えていく中で児童の心に価値語が植え付けられていった。新しい価値語を学び、日記の中に文字として表現した。自分の心の中に取り込んだ価値語を自分の言葉を使って表現することができるようになることで、価値語の定着と価値語の広がりが見られるようになっていった。

## 3.3 ほめ言葉のシャワーによる特別支援教育を意識した学級経営

ほめ言葉のシャワーは、5月の連休明けから行った。菊池省三氏が実践していたものを取り入れ、そこにアレンジを加えた。まず、一人1枚ずつ日めくりカレンダーを作った(写真3・4)。そこには、日付と自分の好きな言葉、その日の行事予定を書いた。その日の日めくりカレンダーの担当になった児童が、帰りの会でほめ言葉のシャワーを受けた。ほめる児童は、ほめ言葉のシャワーを受ける友達の「世界に一つだけしかない、私だけが見つけた〇〇さんの素敵な行動」として、ほめた。そこに、「そこから」という言葉をつけ、その行動から見えてくる〇〇さんの素敵な所を続けて発表した。初めは、挙手した児童から発表していった。次に、列ごとに順番に発表していった。全員にほめ言葉を言ってもらった児童は最後に、「みんなに伝えたいことが3つあります」と言ってみんなに感想を伝えた。1日一人の児童に対してほめ言葉のシャワーを行うことで、児童の自己肯定感の高まりとともに、信頼関係を築くことができた。



写真3 日めくりカレンダー



写真4 過去の日めくりカレンダー

## 4. 考察

### 4.1 自己肯定感と特別支援教育を意識した学級経営とQ-U結果

自己肯定感を高める実践、「価値語」・「成長ノート」・「ほめ言葉のシャワー」を毎日継続して行った。その際には特別支援の必要な子どもには教員は意図的な配慮を行ったり、特別支援教育の観点でそれぞれの実践や個別の成長を評価するように努めたりした。例えば特別支援を必要とする児童は友達との人間関係においてトラブルが多いため、他の児童から、マイナス面しか見てもらえないことが多い。しかしほめ言葉のシャワーにより、特別支援を必要とする児童の良い面を見つけてもらえるため、こんな良い所もあるんだなど、良い面も理解してもらえるようになった。

その結果、児童が学級生活に対して安定的な範囲に属している割合は、20XX年度（11月）95.0%であった。その中でも学級生活満足群には、57.5%の児童が属していた（図1）。これは、20XX-1年度4年生時（11月）に比べると、安定群は5%上昇していた（図2）。その中の学級生活満足群は、7.5%上昇していた。ここで注目すべき結果は、特別支援を必要とする児童3人が4年生時は学級生活不満足群に属していたが、5年生時には3人とも安定群に属していたことである。また、特別支援を必要とする児童1人は4年生時には非承認群に属していたが、5年生時には安定群に属する結果となった。

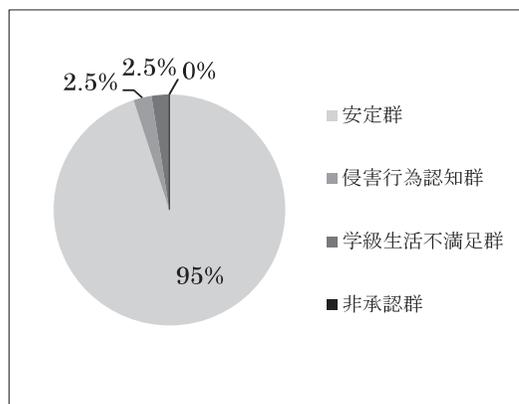


図1 20XX年度のQ-U得点結果（5年）

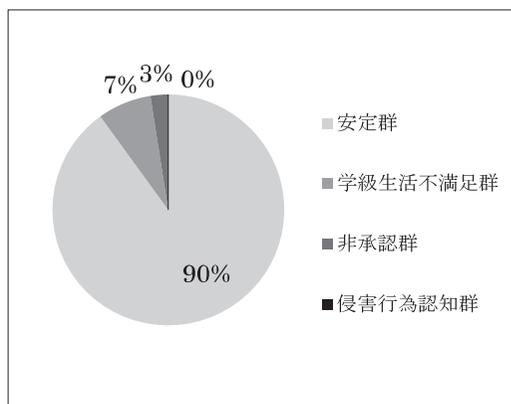


図2 20XX-1年度のQ-U得点結果（4年）

この結果は、「価値語」を学級経営のベースとして位置づけ、日々価値ある行動を意識させ、児童の中に具体的な行動規範や目標を設定することで、個人にとどまらず学級全体が向かうべき具体的なゴールを意識することができたことにより、安定した学級経営ができたことを示していると考察した。この安定群や満足群の中には、特別支援を必要とする児童も含まれている。価値語により、

学級全体が同じ目標に向かって日々成長をとげることで、自分も学級というチームの一員としての所属感が特別支援を必要とする児童にとって学級が安心で安全な場所として位置づけられてきたのだと考えられる。

「成長ノート」では、自分を振り返ることで目指す目標に対しての自分の位置を確認し、目標に向かう意識を高めることができた。これにより、毎日を漫然と過ごすのではなく、目標を意識することで意欲を喚起できたと考える。そして、昨日より今日の自分の成長に気づき、価値ある行動という尺度を通して客観的に自分自身を振り返ることができた。自分の成長とともに学級の仲間の成長にも気づくことができた。つまり、学級全体の成長も意識することができた。

「ほめ言葉のシャワー」では、毎日1人ずつほめ言葉のシャワーを受けた。ほめ言葉を言う児童は、毎日友達のよい行動を見つける観察力を身につけていくとともに、友達の良い面を見ようとする心情も育った。これにより、友達を肯定的に見る力が育ってきた。しかも、友達がほめられる児童のよい行動を見つけることで、ほめられる児童の新たな良い面を学ぶことができた。これは、学級の仲間一人ひとりに良い面がたくさんあるという実態を学ぶことにつながった。特に、特別支援を必要とする児童理解に有用であった。児童は全ての児童の良い面を探することができるようになるからである。ほめられる児童は、39人の友達から自分のよい行動をほめられた。普段の生活の中で39人もの友達からほめられる経験を味わうことはできない。自分の気づいていなかったよい行動をほめられることで、自分にはこんなに良い所があるのだと気づく児童が多かった。これにより、自己肯定感が高まったと考えられる。自己肯定感を高めるには、何より具体的な行動をほめられることが効果的である。特に、毎日同じ学級で生活している友達にほめられることは、何よりうれしいことである。学級の仲間全員が自分をほめてくれることにより、学級が安心できる場所になった。そして、学級に自分の居場所があることに気づかされた。これが、学級生活の安定につながり、学級生活満足につながったと考えられる。友達の良い所をお互いに見つけ合い、全員でほめ合う時間は、笑顔があふれ全員が満足した気持ちになれた。それを帰りの会で行うことで、毎日学級の全員が笑顔でさようならを迎えることは、学校が居心地の良い場所として認識され、学校の門を出ていくことにつながった。この毎日の積み重ねは、学級が安心で安全な場所として改善されることにつながったと考察した。

## 4.2 価値語による特別支援教育を意識した学級経営と児童の変容

### 4.2.1 価値語カレンダー

菊池省三氏が作成した日めくり「価値語カレンダー」を黒板横に掲示した。そのため、児童は毎日価値語を目にすることができた。日めくりになっているため、児童は31ある価値語を毎日一つずつ、年に10数回目にすることになる。その中で、自分のお気に入りの価値語もできたようである。また、日めくりのため、担任がめくり忘れていると児童から「めくっていいですか」と自らめくる児童もあらわれた。このカレンダーが生活の一部として位置づいてきていた。

児童は、ここに出てくる価値語を「成長ノート」や「ほめ言葉のシャワー」にも使っていた。価値ある行動を目にした時、この価値語とからめて「成長ノート」に書いたり、友達の良い行動をこの価値語と結びつけて「ほめ言葉のシャワー」で発表したりする児童も増えていった。この日めくりカレンダーに出てきている価値語が心の中に位置づいている証拠でもあった。

### 4.2.2 1／5黒板

黒板の1／5を利用して、担任が見つけた児童の価値ある行動を価値語として黒板に記していった。黒板に書くことで、児童は毎時間この価値語を目にすることになった。学級全体に価値ある行

動を広げ定着させていくためには、言葉として黒板という目につく場所に記すことで、その言葉が児童に意識化されていった。その日の児童の価値ある行動を価値語として記すことで、タイムリーに児童の心に響いていった。これは、日々目にする日めくり「価値語カレンダー」とは違った方法で、価値語が児童に定着していくことになった。価値語として自分の行動を認められた児童は、この価値語が自分の価値語になっていく。他の児童にとっても友達の行動が価値語としてより高められることで、価値語と行動が具体的に結びついていくことになった。同じような行動をとった時に、行動を強化することにつながった。これは、特別支援を必要とする児童に対しても効果があった。価値ある行動を価値語という言葉として、目につきやすい場所に掲示することで、視覚支援とソーシャルスキル学習に活かされた。価値ある行動は忘れてしまいやすいが、それを言葉として黒板に掲示することで、児童には言葉が入り、言葉を思い起こすことで行動を喚起することができた。

#### 4.2.3 新しい価値語が生まれる

日めくり「価値語カレンダー」や「1/5黒板」を利用した価値語を毎日目にする中で、子どもたちは価値語を自然に意識するようになっていった。価値ある行動とは何なのか、価値ある行動とどのような価値語が結びつくのかを考えるようになった。これは、「成長ノート」として書かせている日記の中にも価値語が出てくるようになったり、「ほめ言葉のシャワー」を行う中で友達の行動をほめるときに価値語と結びつけて発表したりする児童が増えてきたことからもうかがえた。「ほめ言葉のシャワー」では、毎日4人程度は友達の良い行動を価値語と結びつけて発表していた。成長ノートの中で、友達の良い行動を価値語と結びつける時、新しい価値語を自分で生み出す児童もあらわれた。例えば、「人に影響されることの美しさ」というものである。友達や先生から影響を受け、それを素直に受け入れることで自分自身が大きく成長するということを表現したかったとのことである。児童が価値あることは何なのかを常日頃から考えているということでもあった。

表1 価値語による児童の変容(児童の日記の抜粋)

「菊池省三先生の日めくりカレンダーの中に『価値ある無理をしよう』という言葉があります。私は、そのセリフが大好きです。担任の先生がそのセリフを言うたびにしみじみと心に響きます。きっとその意味は、悪い事には応じず、良い事に応じる気持ちを持つとうということだと私は予想しています。けれど、菊池省三先生はもっと良い意味をつけますと思います。私はこの言葉をもとにして、友達や家族や命をもっと大切にしていきたいです。菊池省三先生が作る言葉と私が作った言葉には差がありすぎていつも（おおっ！）と思います。菊池省三先生のような言葉を書いて声をかけていきたいです。」「今日、私はまた一つ大切な言葉を知りました。『価値ある無理をしよう』という言葉です。先生がそう言った時は、よく意味が分かりませんでした。この言葉の意味は、価値のある無理をして、自分自身を強くするという事です。価値ある無理をしても、結果が思うようにならない人だっています。例えば、昨日の相撲大会の日も、〇〇君や〇〇君は体の大きな人達に誰よりも強く勇気を持って戦っていました。そのことを思い出して分かりました。〇〇君や〇〇君は、誰よりも『価値ある無理』をしたんだと思います。価値ある無理なんて、みんなできるわけではありません。だからこそ、その人は大きく成長するのだと私は今日、その言葉とそれをしていた人を見つけることができました。」

このように児童は、毎日目にしていく菊池省三氏の日めくり「価値語カレンダー」の中にある価値語を自然と自分の中に取り込んでいることがうかがえる。そして、学校生活の中で自分や友達の

行動を価値あることとは何なのかという視点で見つめているからこそ、行動と価値語が結びついた時、心に響くのであろう。それを、成長ノートやほめ言葉のシャワーの中で言語として意識し、表現している。

菊池省三氏の日めくり「価値語カレンダー」の中に出てくる価値語が具体的なイメージとして自分の中に位置づけることは困難であろう。しかし、価値語を何気なく毎日目にする中で、価値語は言語として自分の中には取り込むことができている。「ほめ言葉のシャワー」などで友達や自分の成長を毎日感じる中で、現実の場面と価値語を結びつけようとする意識も芽生えてきた。友達の頑張っている姿を見た時、自分の中に位置づけられている価値語と結びつけることが少しずつできるようになっていった。友達や自分の頑張りが成長ぶりと価値語が結びついた時、その行動は価値語によってより強固なものとなり、価値語も具体的な場面の中でより輝きを増すものとなった。

#### 4.3 成長ノートによる特別支援教育を意識した学級経営と児童の変容

成長ノートを継続していく中で、日めくり「価値語カレンダー」や「1/5黒板」に書かれている価値語を成長ノートに書いてくる児童も増えてきた。価値ある行動とは何なのか、どのように成長していくべきなのか、自分の心の中に価値語を取り込みそれを言葉として成長ノートに表現できる児童が少しずつ増えてきた。その児童の言葉を学級通信で知らせることにより、友達から友達へと価値語が広がっていった。

成長ノートを日記として毎日書かせることで、自分の行動を客観的に見つめる視点も身につけてきた。また、物事の原因や結果、周りの様子など観察力も向上した。特に、自分を少し離れた位置から見つめるメタ認知能力の育成に効果があったと考える。これは日記の内容に表れた。そして、書くことに対する抵抗感がなくなってきたことが大きな成果ともいえる。4月には、何をどのように書いたら良いのかわからないという児童が多かったが、毎日の日記を積み重ねていくことで、何をどのように書けばよいのかを少しずつ学ぶことができた。また、日記を通信にのせることで、同じテーマでもどのような視点でどのように書けばよいのかを友達の日記から学ぶことができた。特に、価値ある行動を見つけた日記をのせることで、価値ある行動や価値あることに焦点を当てた日記が少しずつ増えていった。例えば行事がある時には、行事をこなすだけのものとして終わらせるのではなく、行事を通して価値あることを学ばせることができた。特に、児童自身が見つけた価値ある行動を学級通信にのせることで、価値あることを児童同士で学び、身につけていくことができた。同じ体験をしている行事において、友達はそこから何を学んでいるのか、児童の言葉で書かれている日記によって気づかされるが多かったようである。友達の思いを知ることで、そこから共感したりつながりが生まれやすくなるがあった。友達の思いを受け止め、そのことを日記に綴ってくる児童もいた。価値ある行動が言葉を通して児童同士の心のつながりを広げていった。これにより、学級の中に自分の思いを受け止めてくれる友達の存在を感じたり、学級が安心できる場所になっていった。これは、特別支援を必要とする児童にとっても、友達や学級が安心できるものとなり、トラブルが減少することにとっても効果があった。日記を通じて安心して自分の思いを書き、伝えることができた。学級が安全で安心できる場所になり、一人ひとりの居場所が学級の中にできた。一人ひとりがつながっていくことで、一人ひとりの思いを大切にできる学級として育っていった。このように、行事の準備段階から行事が終わるまでテーマを与えて日記を書かせることで、行事が単なる行事に終わらず、価値ある行動や自分の成長・学級の成長に視点を当てて、見つめ直し振り返ることができた。

表2 成長ノートによる児童の変容(児童の日記の抜粋)

「日記を続けて成長したことの1つ目は、自分で考えて書く力です。2つ目は、長い文章を書けるようになったことです。」「僕が日記を続けて成長した事は、日記と友達になれたことです。」「日記によって私は2つ成長しました。1つ目は、今までよりもはるかに文章を書くのが上手くなったことです。2つ目は、人の日記を読んで良い所をぬすんで自分の日記で使うことです。」「日記を書き始めてからは、まるで魔法にでもかかったかのように、書くことの楽しさを感じ出しました。今では、文章を考えて書くことが楽しいです。大人になってもこの日記を見れば、いろんな思い出を思い出させてくれると思います。」「私が日記で成長したと思うことは四つあります。一つ目は、日記を毎日続けてきたことで、文章を考え工夫する力が身につきました。二つ目は、日記を書いているうちに人の気持ちが分かってきたことです。三つ目は、自分の取った行動を振り返ることができて、反省することができることです。四つ目は、毎日書いてきたことで、何事も後回しにしなくなったことです。」「日記を通して、私は一日一日を振り返ることができるようになりました。また、通信で友達の日記を読むことで学べることがたくさんありました。友達の日記を読むことが楽しみの一つです。日記は宿題ではなく、大切な記録という事が分かってきました。」「日記の良い所は、見返すことができ、自分の成長を確かめることができることです。」「日記とは、自分の成長を見返せるただ一つのノートであり、世界に一つしかない自分だけのノートだと思っています。」

このように成長ノートを日記として毎日書かせることで、児童は書くことに対する抵抗感が少しずつ減っていった。4月当初は、日記に何を書いたら良いのかわからないという児童が多数いた。しかし、「5年生になって1週間で成長したこと」「運動会へ向けての目標」など書くテーマを与えることで、何を書けばよいのか悩まずにすむ児童もいた。また、日記を学級通信にのせることで、友達がどのような題で書いているのか、同じ体験をどのような視点で書いているのかを学ぶことができた。毎日、400字を書かせることの積み重ねは、書くことに対する抵抗感を大きく軽減させた。まるで、呼吸をするように当たり前に行うことができる児童も次第に増えた。

日記は、1日の自分を振り返ることができる。「4月の1ヶ月で成長したこと」などのテーマを与えることで、自分の成長を振り返らせた。人と比べるのではなく、過去の自分と比べることで成長を実感したり、どこに向かって頑張るのかを意識させたりすることができた。特に、行事の前後などに「運動会で成長したいこと」など、意図的なテーマを与えることで、価値ある行動とは何なのかを意識させることができた。つまり、行動の指針を示すことができた。これを継続していく中で、児童の日記の中に、価値語が登場してきた。自分の目指すべき方向性や行動が見えると、その行動を価値語と結びつけて表現できるようになってきた。行事などの非日常の行動の中に価値ある行動を見る視点が生まれ、価値語と結びつける児童が増えた。メタ認知能力は、高学年から身につけていく。自分を俯瞰する視点を持たせることは、すべての児童において自分の行動を振り返らせることに対して効果が見られた。自分の行動を振り返らせることで、どのように振舞うべきかを客観的に観察し、次への行動の指針とすることができた。これは、特に特別支援を必要とする児童に対して有効な手段であった。特別支援を必要とする児童が人と接する時や行事に対する取り組みにおいて効果が見られた。友達との関係においてもトラブルがずいぶん減った。自分の行動を振り返る習慣が少しずつ身についたことで、ソーシャルスキルトレーニングとしても効果があった。

日記を続けることで自分の成長だけでなく友達や学級の成長にも目が向くようになった。学級通信に日記をのせることで、児童は友達の日記を目にすることになる。そこでは、同じ体験をした友

達の自分とは異なった視点からの成長を学ぶことにつながった。同じ体験をしているので、友達の日記に対して共感する部分が多かった。自分では気づかなかった友達の成長を友達の日記から学ぶことも多かった。自分にはない新しい視点からの気づきにより、改めて友達の成長を目の当たりにした。これにより、今までとは違った新たな友達の発見があり、友達の良さを認め信頼を増していった。特別支援を必要とする児童の一人は、5月に「先生、ぼく、変わりたいです。」と訴えてきた。これまでの自分を振り返り、もっと良い自分になりたいと言ってきたのである。「先生がいないときにちゃんとやらないと成長の意味がありません。だから、がんばろうと思いました。3月までに成長して、6年生にいきたいです。」と日記に書いてきた。特に、特別支援を必要とする児童の価値ある行動や成長ぶりは友達の日記により今まで気づかなかった新たな面を気づかせ、特別支援を必要とする児童に対して少しずつ信頼を増していった。

#### 4.4 ほめ言葉のシャワーによる特別支援教育を意識した学級経営と児童の変容

##### 4.4.1 ほめる児童の変容

毎日帰りの会に「ほめ言葉のシャワー」を行った。ほめる側児童の変容は、友達を見る観察力が向上したことである。普段は何気なくともに生活している友達であっても、その日のほめ言葉のシャワーを受ける児童に対しては、その児童の行動をよく観察するようになった。その日の主人公であるほめられる児童のよい行動を見つけようとする菊池省三氏の指摘する「美点凝視」ができるようになっていった。また、ほめ言葉を言うことで、自分で文章を考え発表する力も向上した。特に、教師から指名を受けて発表する児童は、すぐに発表できるようになり、事前に準備をする力とともに突然の指名にも関わらずすぐに文章をまとめ発表する力が育っていった。そして何より、学級の雰囲気に変化していった。ほめ言葉のシャワーにより必ず1日1回は自分の言葉で友達の良い行動をほめることになった。ほめている児童の表情は、柔らかく優しい。学級の仲間に対してあたたかい言葉をかけて、1日の学級生活を閉じることは、学級全体が優しい雰囲気に包まれて1日が終わる。この継続は、特に特別支援を必要とする児童に対して、学級が安全で安心な場所に変化していった。学校での生活の中でトラブルが起きた場合でも、1日の最後の帰りの会では、お互いが友達の良い行動を見つけ、ほめ合って1日が終わる。こうして、毎日、帰りにはみんなが笑顔で帰ることができた。この日々の実践の積み重ねは、特に特別支援を必要とする児童に対して効果が見られた。特別支援を必要とする児童はトラブルが多い。これらの児童に対してのイメージはどうしても悪くなる。しかし、ほめ言葉のシャワーにより良い行動を認められほめられることで、こういう良い所もあるのかと他の児童の新しい気づきにつながり、少しずつ特別支援を必要とする児童に対するイメージが変化していった。特別支援を必要とする児童と他の児童の信頼関係づくりにも大きな効果が見られた。この好循環は、児童同士の暖かな関係づくりに効果があった。

1日に1人の児童のほめ言葉のシャワーを行うことは、1日に39個のほめ言葉を聞き合うことになる。これが1巡すると約1600個のほめ言葉が発表されることになる。これは、学級の中にあたたかな友達を認める言葉があふれることになった。また、友達のほめ言葉を聞き合う中で、素敵なおほめ言葉を学ぶことにつながった。ほめ言葉の中に、価値語が含まれることがある。「〇〇さんは、トイレのスリッパを他の人の分まで揃えていました。そこから、『一人が美しい』ということがわかりました」と。日めくり「価値語カレンダー」の中にある「一人が美しい」という価値語をほめ言葉の中に入れて発表する児童があらわれた。毎日、機会あるごとに価値語を紹介している中で、児童自身が価値語を少しずつ自分で使えるようになってきた。価値語を含んだ友達のほめ言葉を聞く中で、心の中にその価値語が根付いていった。価値語が単なる言葉として存在するのではなく、友達の良い行動と結びついて価値語が具体性を持つようになっていった。

表3 ほめる児童の日記の内容(児童の日記の抜粋)

「僕は、ほめ言葉のシャワーで、人をほめるすばらしさと新しい言葉を学ぶことができました。人の良いところを探していると、他にも知らなかったことがいっぱい分かりました。」「ほめ言葉のシャワーで成長した事は、言葉です。」「価値ある言葉を言ってくれる人のおかげで、価値ある言葉を覚えることができます。」「僕がほめ言葉のシャワーを続けて成長した事は、考える力です。臨機応変に対応することは難しいです。けれど、毎日ほめ言葉のシャワーをしていけば、臨機応変に対応する事にもなれると思います。」「ほめ言葉のシャワーを毎日やっていると、ついにほめ言葉が上手な人の一人に名前が出ました。その日から、私は自分に自信をもって発表することができました。7/16日は私の誕生日です。どんなことを言ってもらえるか楽しみです。」「ほめ言葉のシャワーで成長した事が3つあります。1つ目は、人の良い所を早く見つけられることです。2つ目は、人の目を見て発表できることです。3つ目は、人の手を借りずに発表できることです。ほめ言葉のシャワーには、人を成長させることができるすごい力があると思っています。ほめ言葉のシャワーは、とても人を笑顔にする素敵な存在です。」

このようにほめ言葉のシャワーを積み重ねていくうちに、児童は新しい言葉や価値語を獲得することができた。教師に投げかけられる言葉よりも友達からの言葉の方が児童の心に響いた。児童は、ほめる児童がほめられる児童をどのような視点でほめるのか興味をもって聞いていた。ほめる児童の言葉の中に人をほめる言葉と価値語を見つけ、獲得していった。友達を使う価値語は、友達の行動と結びつけられて発せられた。これにより、価値語は具体的な行動を伴って、イメージしやすいものとなっていった。

ほめ言葉を考える中で、自分の見たほめられる児童の行動と何とか価値語を結びつけようとする意識の高まりが見られた。他の児童が価値語と結びつけた発表を聞く中で、自分が見つけた良い行動と価値語を結びつけることはできないかと考えるようになった。ほめ言葉を聞く中で、一つの価値語の意味を様々な行動と結びつけながら、自分の心の中にその価値語を獲得していった。価値語の様々な意味づけを獲得すると、自分も友達の良い行動と価値語を結びつけて、あるいは新しい価値語の意味付けをして発表しようと試み始めた。単に友達の良い所を見つけ発表するのではなく、良い行動と価値語を結びつけて発表しようとする考える力をお互いに伸ばしていった。

毎日ほめ言葉のシャワーを継続することは、児童が自分の言葉で友達をほめることを積み重ねていくことになる。自分だけが見つけたほめられる児童の良い行動を発表する。これを、他の児童も興味をもって聞くのであるから、毎日真剣に自分の言葉を紡ぎ出すことになる。真剣に聞いている友達を前に、発表することは勇気のいることである。しかし、毎日の積み重ねは大きな自信につながった。特に、担任から「価値語と結びついていますね」などほめられることによって、自信はより強固なものとなり、発表内容にまでこだわっていくようになっていった。「人をほめている時の表情が一番美しい」と菊池省三氏は語る。ほめ言葉を紡ぎ出していく中で、本当は自分自身の心を育てているのかもしれない。ほめ言葉を発することは、間接的に人をほめることのできる自分自身をほめていることにつながっているのであろう。

表4 日記における児童自身の変化の認識(児童の日記の抜粋)

「ほめ言葉のシャワーで成長した事は、人を見る目（観察力）が伸びたんじゃないかなと思います。次は、考えることや短い文章でいう事をがんばりたいです。」「ほめ言葉のシャワーでたくさん人の良い所を見つけていると、自分も〇〇さんみたいにがんばろうという気持ちが出てきました。私は生長ではなく、成長したいです。」「ほめ言葉のシャワーで成長した事が2つあります。1つ目は、良い所を見つけるのが上手になりました。2つ目は、価値ある言葉を言えるようになりました。」「ほめ言葉のシャワーで成長した事は、いつもは見ていない人のことも見るようになったことです。国語力もあがりました。ほめ言葉を言って、いろんな人が笑顔になれたんだと思います。ほめ言葉を考えるのって難しいと思います。けれど、その難しいことを乗り越えていたら幸せが待っているんだと思います。」「私は、ほめ言葉のシャワーで2つ成長しました。1つ目は、人の良い所だけを見つける観察力が身につきました。悪い所は目をつむる。これって結構難しい。2つ目は、人のことを素直にほめ、相手を受け入れることができるようになったことです。先生の言う通り、自分の思い通りに人を変えることはできません。だから、まずは相手の良い所だけを見つけ、相手を受け入れることが大切です。」

普段何気なくとも生活している友達ではあるが、1日1人ずつその日の主役となり、みんなからほめられる。他の児童は、ほめられる児童の1日の行動の様子をしっかりと見つめる。「世界に私だけが見つけた〇〇さんの良い行動」という課題を与えられる。一人の児童を観察することで、今までは知らなかったその児童の行動に目が向く。毎日の生活の中では、仲の良い友達としか一緒に遊ばず会話もしない児童達であるが、学級の友達を毎日一人ずつしっかりと見つめていく習慣が身につけていった。これは、特に、特別支援を必要とする児童に対して大きな効果が見られた。特別支援を必要とする児童は頻繁にトラブルを起こすため、他の児童から避けられがちになる。トラブルに巻き込まれたくないからである。しかし、特別支援を必要とする児童がその日の主役となりほめ言葉を受ける立場になると、他の児童は1日その児童の行動を観察することになる。ほめ言葉は、その児童の良い行動を見つけることであるから、教師がその児童の良い行動をほめるよりも、児童達がその児童の良い行動を見つけ出し、ほめ言葉を伝えることに効果があった。他の児童が特別支援を必要とする児童の良い行動をほめることで、自分が今まで気づかなかったその児童の良さに気づかされることにつながった。こうして、特別支援を必要とする児童への見方が変化し、学級の仲間として位置づけられ、受け入れられていった。人には悪い所もあるが、良い所もある。だからこそ、人間なんだという柔らかさを持った心が育てられていった。

表5 日記における児童の変容の認識(児童の日記の抜粋)

「ほめ言葉のシャワーを続けて成長した事の1つ目は、人の良い所を見つけることです。2つ目は、人の話を聞く力です。3つ目は、人に正対する事です。人はかげながらも頑張っていることはたくさんあると思うので、これからも人の良い所をたくさん見つけていきたいです。」「だんだんみんなが笑顔になっています。それもほめ言葉のシャワーのおかげです。」「ほめ言葉のシャワー、私はこれを5年生の最後の最後の日まで続けていきたいと思います。」

ほめ言葉のシャワーを聞く力も伸びていった。自分もほめ言葉をしなければならない状況にあり、友達のほめ言葉を学ぶことは必須条件でもあった。友達のほめ言葉の視点を学び、自分のほめ

言葉に活かそうとする態度が、学級の中に真剣に話を聞く雰囲気を作り出していった。また、価値語を取り入れたほめ言葉を聞くことで、価値語に対する意味づけをしながら価値語を自分の中に位置づけることにつながった。発表している児童に正対して聞く児童がいた。初めは一人二人であったが、「一人が美しい」という価値語を学ぶと、自分がどういう行動をとらなければならないのかを意識し、自分一人だけでも正対して聞こうとする強い心が育っていった。「一人が美しい」を実践している友達の行動から学び、自分も話を聞く時には、発表している友達に対して正対して聞くという態度が育っていった。

ほめ言葉のシャワーは、今まで気づかなかった学級の仲間の良い行動を、ほめ言葉という児童の新しい価値づけによって行われた。ほめている児童の表情は柔らかであり、ほめられる児童は39人の友達によってほめられることで、普段味わうことのできない喜びに包まれた。学級全体があたたかい言葉に満ちた。特別支援を必要とする児童も、この場ではあたたかい雰囲気の中に自分の居場所を見つけることができた。トラブルが多く、友達とギスギスした人間関係が積み重なっている特別支援を必要とする児童も、友達をほめ自分もほめられることによって学級の中に自分の居場所が作られていった。どの子も笑顔になる時間である。そして、その笑顔のまま下校することになる。笑顔で下校することで、次の日もまた学校に来たいという気持ちが強まっていったようである。

表6 ほめ言葉のシャワーを言われた児童の日記(児童の日記の抜粋)

「ほめ言葉のシャワーをして、ほめる人もほめられる人もみんな幸せな心になれたと思います。私も実際にほめられる側になってとても幸せでした。」「みんなにひと言ひと言、言われると、うれしくてニコニコしてしまいました。やっと前に出たことのある人の気持ちがわかりました。」「みんなに自分の良い所を見つけてもらって、言われると王様気分になってしまいます。」「ほめ言葉のシャワーで、言われた人も幸せになれるから、これまでの自分ではなく新しい自分に出会えるチャンスだと思います。」「私が日直になった時、とてもうれしかったです。39人から言われて、私ももっとみんなの良い所を見つけてあげたいなと思いました。」「自分にはこんな良い所があるんだとわかりました。自分では見つけることができていないことを見つけてくれる友達に感謝したいです。」

子どもたちは普段の生活の中で、ほめられる体験は少ない。身近にいる大人や友達から注意指導されることが多い。そうした中で、39人の友達から異なった言葉で自分をほめてもらえる体験は、とてもうれしいものであり、かけがえのない時間となった。ほめ言葉のシャワーをもらうことで、自己肯定感が高まることは間違いない。その上、今まで自分が気づかなかった良さを友達が見つけてくれる。それは、自分の行った具体的な行動に基づくものであるため、信頼度も増していた。学級の仲間からのほめ言葉は自分の良さを見つけ出し、可能性を広げてくれた。自分のとった行動が価値あるものであること教え、時には価値語とともに意味づけしてくれた。自分にはこんな良い所があったんだと、自分を客観的に見る視点ももらえた。自分を俯瞰的に見る視点が少しずつ身につき、自分の行動を客観的に振り返る習慣が少しずつ身についてきた。これに、友達からの価値ある視点を伝えてもらうことで、自分の行動の価値や良さを学んでいくことになった。

自分では気づかなかった自分の良さを教えてくれた友達に感謝する気持ちが芽生えていった。次は自分がほめてくれた友達の良さを見つけようとする心は、人間として自然な感情なのかもしれない。ほめてもらったうれしさや喜びを、次は自分だけが見つけた友達の良さを伝えることで恩返しをしたいと思う児童が増えていった。

表7 特別支援が必要な子どもの日記

「ほくは、自分の良い所をわからなかったけれど〇〇先生は、『たくさんいいものを持っているよ。』と言ってくれました。だからほくは、「自分の良い所」という題の日記を書きます。その後、〇〇先生に「笑顔がすてき。」と言われました、その事は、とてもうれしかったです。ほくも、どうやったら変われますか？教えてください。」

上記の日記は特別支援を必要とする児童のものである。ほめ言葉のシャワーは、特別支援を必要とする児童との信頼関係を築き上げることにとても有効であった。特別支援を必要とする児童とは、トラブルが原因でうまく信頼関係が作れない。しかし、特別支援を必要とする児童も、自分の良さを見つけほめてくれる。どんなに関係が悪くても、自分をほめてくれるということは、自分の良さを認め自分に尊敬の念を持っているということである。自分をほめてくれる友達を悪く思うことはなくなっていった。

これにより、特別支援を必要とする児童に対しても、少しずつ心を開き、次は自分が特別支援を必要とする児童の良い所を見つけようと努力した。この関係性が特別支援を必要とする児童との信頼関係をより確かなものに作り上げていくことにつながった。今後は、図3に示すような自己肯定感を高める実践を積み上げながら、学級経営というダイナミックな視点からの検証をより一層進めていかなくてはならない。

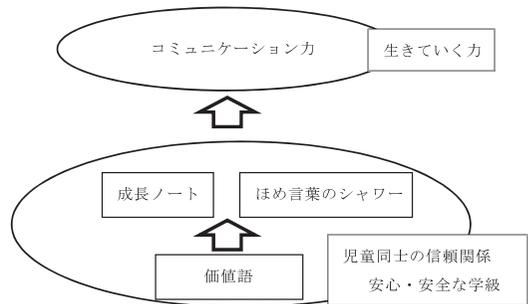


図3 自己肯定感を高める実践

## 引用文献

- 1 石川美智子(2016)「学級経営の動向－学級の変遷・戦後の学級経営論文と小学校教師への調査－『佛教大学教育学部論集』27,pp.15-32.
- 2 主な著作は以下。菊池省三(2012)『小学校発一人ひとりが輝くほめ言葉のシャワー』日本標準,菊池省三,関原美和子(2012)『言葉のシャワーの奇跡』講談社,菊池省三,吉崎エイジニョ(2013)『学級崩壊立て直し請負人』新潮社,菊池省三,菊池道場(2014)『コミュニケーション力あふれる「菊池学級」のつくり方』中村堂,菊池省三,関原美和子(2014)『菊池省三流奇跡の学級づくり』小学館,菊池省三(2015)『挑む私が問うこれからの教育観』中村堂,吉崎エイジニョ(2015)『学級崩壊立て直し請負人菊池省三、最後の教室』新潮社,本間正人・菊池省三(2015)『コミュニケーション力で未来を拓くこれからの教育観を語る』中村堂,菊池省三,堀井悠平,乾孝治,渡瀬将基,牧野真雄(2015)『一人も見捨てない教育の実現挑戦! 四国四県からの発信!』中村堂,菊池省三,本間正人,菊池道場(2016)『価値語100ハンドブック』中村堂,菊池省三,菊池道場(2016)『1年間を見通した白熱する教室のつくり方』中村堂,菊池省三,関原美和子(2016)『菊池省三の学級づくりの方程式』小学館,菊池省三,本間正人,菊池道場(2016)『個の確立した集団を育てるほめ言葉のシャワー』中村堂.
- 3 菊池省三(2014)『菊池省三先生の価値語日めくりカレンダー』中村堂.